

教員自身が予測困難な状況でどう動くか

宮島 卓朗

今年度（令和二年度、二〇二〇年度）は、東京オリンピックの年でしたが、同時に小学校の学習指導要領の全面実施の年でもありました。意識している方はどれくらいいるでしょうか。

学習指導要領解説の総説には、「予測が困難な時代になっている」と書かれています。ここには「感染症の拡大」という文言はありませんが、まさに言い当てているともいえます。

また、その続きには次のようにも書かれています。

子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや（中略）複雑な状況変化の中で目的を再構成することができるようにすることが求められている。

この文章の主語である「子供たち」を今回のコロナ禍の中で、「教員」や「学校」「教育委員会」に置き換えて

みても、同じことが求められていることに気がきます。

本校では、いち早くオンライン授業に取り組み、夏休みの短縮もありませんでした。また、休校中のオンライン面談や希望登校を実施するとともに、再開後もオンライン学習日を設定するなど、感染症や生徒の状況変化に対応すべく、教職員が協働して困難に対応しました。

すべてがうまくいったというわけではありませんが、今も、どうしたら生徒の学びを止めないで、さらに進められることができるか、生徒の心のケアはどうしたらいいかという目的や課題のために、試行錯誤しながら進めています。

自分が信大に在学していた三十年前スタートした本会も、休会ということは残念ですが、これから向けどんな一歩が踏み出せるか、他者と協働して、最適解をこれからも求めていきたいものです。

子供に求められている「力」は私たち教員を始め、大人にも必要な「力」なのです。

（みやじま たくろう 長野県屋代附属高等学校附属中学校）